

「田原の美術 郷土ゆかりの書家」出品リスト

会場 田原市博物館 企画展示室2

期間 令和元年11月23日(土)～令和2年1月19日(日)

作品名	年代	作者	点数	備考
雲龍	—	石川雲鶴	1面	
もともと地上に道はない	昭和56(1981)年	石川雲鶴	1面	
虚中	—	石川雲鶴	1面	
輪	昭和63(1988)年	石川雲鶴	1面	
杜甫詩「江亭」より 「水流心不競 雲在意俱遲」	—	増山楽道	2幅	個人蔵
松柏寿	—	増山楽道	1幅	
和歌自詠 「王羲之の曲水宴をしのびつつ吾等蘭亭に觴かたむく」	—	高平泉山	1面	
勤儉譲 二宮(尊徳)先生	—	高平泉山	1面	
万葉一首(巻1-24) 麻績王歌「うつせみの…」	—	高平泉山	1面	
王維詩「過香積寺」	—	小笠原辰一	1面	
松尾芭蕉 笈の小文の一節	—	川口青澄	1面	
嶋	—	田中秀煌	1面	

増山楽道 明治22(1889)年～昭和46(1971)年

明治22年、渥美郡波瀬村(現田原市波瀬町)に生まれる。本名は多一。大正11年、丹羽海鶴に師事。大正14年、文部省習字科検定試験に合格し、翌年に上京。昭和8年、同郷の鈴木翠軒とともに「新講書道史」を編著。また、東京都教育書道会理事、大阪毎日新聞書道展審査員となる。昭和10年、書聖中林梧竹の遺墨を研鑽し、書眼覚醒。昭和20年、空襲により小石川の自宅が全焼すると翌年帰郷。昭和25年には、名古屋市立大曾根中学校講師となり、梧風会(中林梧竹書研究)を結成、梧風展(昭和29年)を開催。昭和46年逝去(72歳)。郷里の城宝寺の華山の霊牌堂に鈴木翠軒らとともに天井等に書を揮毫。

高平泉山 明治33(1900)年～平成9(1997)年

明治33年、渥美郡泉村(現田原市村松町)に生まれる。本名は修一。大正6年、愛知県第一師範学校に入学。在校中に書道教官浅野醒堂より「泉山」の号を授けられる。昭和8年、丹羽海鶴、尾上柴舟を師として書道に精励し文部省習字科検定試験に合格。昭和26年、泉村教育長。昭和39年、渥美町文化財保護審議会委員。昭和51年、渥美町町政功労者受賞。昭和61年、渥美町文化協会より文化功労賞。翌年、渥美町郷土資料館にて米寿記念展を開催。昭和63年には、渥美町文化協会書道部会を結成し、初代会長に就任。翌年より郷土資料館にて濤聲展を開催。平成4年、伊良湖に「柳田國男逗留の地碑」「高松宮妃喜久子殿下御歌」揮毫。旧渥美地内には氏が揮毫した作品が数多く残る。平成9年逝去(97歳)。

石川雲鶴 大正11(1922)年～平成18(2006)年

大正11年、岡崎市に生まれる。本名は政利。昭和26年、手島右卿に師事。昭和28年より独立書展に出品し、翌年独立書人団会員となる。昭和59年、中部日本書道会理事。昭和61年、愛知県文化功労者表彰を受ける。平成6年、独立書人団理事、同9年より毎日書道会参与となる。平成20年、遺族より、それまでにゆかりのあった田原市へ作品を寄贈。平成18年逝去(84歳)。

小笠原辰一 昭和3(1928)年～平成26(2014)年

昭和3年、渥美郡泉村(現田原市江比間町)に生まれる。今井凌雪に師事。平成元年、渥美町郷土資料館にて濤聲展を高平泉山等とともに開催。平成5年、日本書芸院展二科会員。翌年、一科会員となり、平成10年に無鑑査会員となる。平成10年、渥美町郷土資料館にて個展「小笠原辰一書作展」を開催。平成26年逝去(86歳)。

川口青澄 昭和11(1936)年～

昭和11年、渥美郡福江町(現田原市小中山町)に生まれる。本名は文哉。昭和31年、鈴木翠軒に師事。昭和51年、翠軒の逝去により、小暮青風に師事。昭和55年の日展で入選。平成元年、読売書法展で読売新聞社賞を受賞。平成7年、読売書法会理事。現在、東京都世田谷区に在住して活躍中である。

田中秀煌 昭和10(1935)年～

昭和10年、渥美郡福江町(現田原市古田町)に生まれる。本名は秀幸。山本潮鶴に師事。平成3年、東洋書芸院展に初入選。平成9、10年、渥美町郷土資料館にて個展を開催。平成13年、産経国際書展で東京都知事賞を受賞。現在、岡崎市に在住し、東洋書芸院展審査同人会員として作品を出品。遊彩書芸院の院長も務める。